



聞き書き 近江町市場・今昔 その4

明治維新から敗戦まで

井沢 宏夫 (金沢市・内科)



見て触って暑さを和らげる、
近江町市場の夏の風物詩
氷柱

明治維新が起き、廢藩と
なり加賀藩も解体された。失つてしまつたのだ。
藩主により手厚く保護され
ていた近江町市場の魚問屋
は、もちろん販売特権を
失うと同時に、魚類を集荷
は他に職業への転身を試

みたが、多くは
失敗し没落し
た。明治十八年
(一八八五年)
の士族(武士)
の破産者は千
人に及んだと
いい、他所へ流
出する者が続
出した。事実、
金沢の人口も

支え、こじきも横行したと
的打撃となつた。市場の
立派な店舗が酒二升で譲渡さ
れたともいう。

JRには、大阪から北海道の札幌を結ぶトワイラー
イトエクスプレスという有名な寝台特急列車があ
る。この列車、大阪発は約二十二時間、札幌発は約
二十三時間かけて千五百キロの行程を走る。飛行機
なら、約一時間五十分で飛ぶ距離である。この列車
は移動手段としてではなく、クルージングを楽しむ
趣味の列車といえよう。これだけの長距離、冬は雪
で運休になつたり大幅な遅れが出ることがあり、今
年二月には二十五時間遅れたこともあつたそ
うだ。また、食堂車で食事を楽しむこともできる。



大正8年に撮影された「官許金沢青草辻(近江町)市場」の柱
(上写真:『まるごと・ザ・金沢近江町』能登印刷より)と、平成21年に立て直された現在の官許の柱(右写真)



原稿募集中

趣味や旅行記、医療・福祉に関するや平和、環境問題についてなど、会員寄稿をお待ちしています。事務局の杉野までご連絡ください。076-(222)5373

会員リレーエッセー ◆◆155◆◆

急がない旅

宮田 英利 (金沢市・歯科)

遠方の目的地に急ぐとき、場所にもよるが、一番早いのは飛行機であろう。飛行機が嫌いな人は鉄道を選択するし、自家用車や高速バスという手もある。自分が子どものころは、まだ蒸気機関車が走つておらず、北陸本線は電化されていたが能登方面は非電化で、ディーゼル列車がのんびり走っていた。電車で大阪に行く場合、自分が小学生のころは四時間近くかかったが、現在は最速の特急で金沢から二時間四十分である。

目的地に急ぐための移動手段として交通が発達し、日本各地が近くなつたのはとても便利なことである。高速公路を使えば鹿児島にだって、車で簡単にに行けそうである。若いときは長距離でも車で移動したものだが、最近は年齢のこともあり疲れやすく

二十年前は、在来線特急や新幹線に当たり前のようになつた食堂車は、今ではこの列車を含め、わずか三列車にしか存在しない貴重なものになつてしまつた。この列車に乗るために遠方から出向く愛好者もいるそうである。急ぐことばかりに気をとられずにこういった列車に乗り、車窓を楽しみ、時間を費やす心のゆとりも必要ではないだろうか。

JRや飛行機を使うことが多くなった。移動に時間を費やすよりも、目的地に早く着き、現地で時間を有効に使うほうがいいに決まっている。ビジネスなら、なおさらである。そうとは分かつていて、移動のためだけに交通手段を選ぶという考え方は寂しいように思う。

JRには、大阪から北海道の札幌を結ぶトワイラー

数独

二重枠(2つあります)に入つた数字の合計はいくつになるでしょう。

【ルール】

- ①空いているマスに、1から9までの数字のどれかを入れます。
- ②タテ列(9列あります)、ヨコ列(9列あります)、太線で囲まれた3×3のブロック(それぞれ9マスあるブロックが9つあります)のどれにも1から9までの数字が1つずつ入ります。

(答え4面)

パズル制作/ニコリ

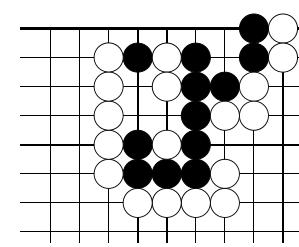
SUDOKU

	9		6				5	
1		3	4	5		2		
4					6			6
	7	1			6	□		4
					2			
5		□	1			8	3	
		2						1
	6		8	5	4			2
3			9		7			



■出題 九段 石榑郁郎

黒先 7分で初、二段以上
<ヒント>一手目の好手で二眼を作ります。



(解答は4面にあります)



中級編



■出題 九段 西村一義

6 5 4 3 2 1

一
二
三
四
五
六

王
后
兵
卒

半
角

持駒

角金金桂

<ヒント>打った角をまた捨てる。
10分で初段

(解答は4面にあります)

立されたり、鮮魚専門の魚市会社ができたり、維新後の新しい体制下で次第に市場活動も盛んになり、明治三十八年(一九〇四)には、公設市場として「官許金沢青草辻(近江町)市場」を建つて。大正時代には、北洋漁業や遠洋漁業などに取り引きが行われた。専門となり、青果も住吉市に離れた小売商人が目立つた。青果は近郊の農民の振り売りや小売り商などの活動は見られず、壊滅状態であった。

明治十年を過ぎて近辺の小さな青果市場が統合され、「青果小売組合」が設立された。昭和六年(一九三一)の満

たされたが、市民の旺盛な食欲と市場関係者の尽力により維持された。しかしながら、サツマ芋の葉を入れたとい

州事変に始まる中国への侵略戦争に引き続き、全面的なアジア太平洋戦争への拡大は戦時色を強め、近江町の若者が次々召集を受けた。市場の若者が次々召集を受けた。青果は近郊の農場に徴兵された。そのため市

場に徴兵され、荷が集まらなくなり、自由な商業活動が制限され出し「統制経済」となり、昭和十八年ごろには遂に近江町市場は窒息せられて市場機能を失つてしまふのである。

余談になるが、戦時中の計画配給制度下では、市民一人一日当たり魚三十匁(百十三グラム)、大人二人にやや大きめの鰯一匹の配給だった。野菜は百五十グラム(二百グラム)の配給で、品不足で野菜が足りず、